

社会とつながり、
心豊かに



女性大学

— 令和8年度 第1期 えるのす連続講座 —

開催
報告

5/26
(火)



令和8年度えるのす連続講座～女性大学～の第1講目「文化としてのマンガの現在」をテーマに開催しました。講師には、星槎道都大学美術学部准教授の竹内美帆さんを迎え、マンガが日本社会でどのように発展し、現代文化の中でどのような役割を果たしているのかについて、多角的な視点からお話いただきました。マンガが「教育に良くないもの」から「芸術」として扱われるようになった社会的評価の変化や背景についてお話しいただき、単なる娯楽にとどまらない、秘められた可能性を探りました。また、女性の主体性表現として注目されるエッセイマンガについて、体験を描く手法やSNS時代の広がりについても紹介。参加者からは「マンガの奥深さを知ることができた」といった声が寄せられました。世代を問わず親しまれるマンガを切り口に、文化理解を深める有意義な時間となりました。

6/2
(火)



第2講目は北海道大学名誉教授であり、一般財団法人北海道道路管理技術センター顧問の萩原亨さんを講師に迎え、乗用車の自動運転に必要な技術と現状について学びました。講義ではまず、ブレーキ・ハンドル・アクセルが電気信号で制御される「バイ・ワイヤ技術」へ進化し、運転操作がコンピューターによって最適化されている現状が紹介されました。続いて、カメラやレーダーなどのセンサーとECUが担う認知・判断機能、ACCやLKASによる前後・左右方向の自動制御など、ADASの仕組みが解説されました。さらに、AIを活用したNOAなど最新の運転支援技術にも触れ、日本で自動運転が進まない背景として社会的受容性の課題が示されました。自動運転技術が高齢者や運転に不安のある人の移動を支える可能性について、参加者が理解を深める機会となりました。

6/9
(火)



第3講目は「ひとり親家庭の現状と支援の現場から見える課題～理解から広がる共生社会～」と題して、NPO法人ひとり親とこどもふぉーむ北海道の平井照枝さんをお迎えしました。講義では、当事者アンケートから浮き彫りになった物価高による生活苦や暖房の我慢、窓口対応の課題など、支援の現場だからこそ見えるリアルな現状が語られました。さらに、男女の賃金格差や社会保障の隙間といった構造的問題にも触れ、誰もが安心して暮らせる社会の実現には「平等」ではなく状況に応じた「公正」な支援が不可欠であると訴えられました。参加者からは「当事者の切実な声を知り、正しい理解の大切さを学んだ」との声が寄せられ、それぞれの立場で何ができるかを考える貴重な機会となりました。

6/16
(火)



第4講目はフードライターの小西由稀さんを講師に迎え、「いま押さえておきたい『食』のキーワード」についてお話しいただきました。講義では、リサイクルとアップサイクル、サステナブルとリジェネラティブといった、似ているようで目指す方向が異なる概念について、「減らす・守る／生み出す・良くする」という対比を用いて解説がありました。聞いたことはあるけれど、本来の意味を知らなかったという意見も多く聞かれ、食に関するキーワードを通して学びが深まりました。また後半では、世界が注目する日本の知恵・食文化として昆布の魅力を紹介。また、北海道内の具体的な事例も取り上げ、地域から生まれる新しい食の価値について理解を深める時間となりました。

6/30
(火)



第5講目は「医療AIと先端半導体で未来の医療をつくる」と題して北海道大学大学院医学研究院教授の工藤興亮さんより、画像診断を中心に医療現場で進むAI活用の最新動向が紹介されました。講義では、CT・MRIなど膨大な画像を解析し、見落としを減らす診断支援AIや、内視鏡・乳がん検診での実用化事例が示され、AIが医師の“もう一つの目”として役立つ様子が具体的に説明されました。後半では、AIを支える先端半導体の重要性と、北海道千歳で進むRapidusの2nm半導体開発が医療の未来に与える期待が語られました。その一方で、データから自分で学ぶAIにも「ハルシネーション」という落とし穴があり、あくまでも「主役は人」であり「AIは助手」であることが強調されました。AIと人が協働する新しい医療の姿を身近に感じる2時間でした。

社会とつながり、
心豊かに



女性大学

— 令和8年度 第1期 えるのす連続講座 —

開催
報告

7/7
(火)



第6講目は、**Sapporoえほんの森、絵本セラピストの森景子さん**を講師に迎え「**輝き続ける女性のための絵本セラピー**」というテーマで、大人だからこそ深く味わえる絵本の魅力について学びました。絵本の多様性や、子どもと大人の読み方の違い、紙の絵本が持つ温かさなど、絵本が人生を支える力となることを実感しました。後半は「はやくちこぶた」「しまふくろうのみずうみ」「だってだってのおばあさん」「Life」などの絵本の朗読を通して、北海道の魅力や日常の中の小さな幸せを感じる、ほっこりとした時間となりました。グループワークでは、互いの気づきや感想を共有し、絵本が生み出す豊かな対話の時間となりました。参加者からは「心が軽くなった」「絵本の奥深さを再発見した」といった声が寄せられました。

7/14
(火)



第7講目は「**北海道の多彩な湿原～その特徴と保全の課題～**」と題し、**北海道大学名誉教授であり、過去には北海道大学植物園の園長も務められた富士田裕子さん**にご登壇いただき、北海道の湿原が持つ豊かな自然環境と、その保全の重要性についてわかりやすく解説していただきました。湿地は多様な生きものの生息地であり、水質浄化や炭素貯留など、私たちの暮らしを支える多くの働きを持っています。しかし世界では湿地の約50%が失われ、日本の湿原の多くが集中する北海道でも、近年は農地開発や排水によって面積が大きく減少するとともに、エゾシカによる植生への影響も深刻化しており、保全が急務となっています。またこれらに加えて、多彩な湿原を未来へ引き継ぐために、若手研究者の育成や研究を継続できる環境・就職先の確保も重要課題であることが示されました。

7/21
(火)



第8講目は、**NPO法人環境り・ふれんず代表理事の石塚祐江さん**を講師に迎え、「**高齢者の片づけ支援と環境配慮～地域で支える3Rの暮らし～**」について学びました。講義では「元気なうちに3Rでお片づけ」をテーマに、もったいない気持ちで捨てられない心理や、手放すための五段活用、民間リユース・資源回収の活用方法、片づけのコツなど具体的な実践ポイントが紹介されました。また、石塚さんご自身の実家お片づけ経験談もユーモアを交えながら語られ、親も子もお互いに気持ちを通わせながら、後悔や無理のない片付けが最適だと教わりました。参加者は自分の片付け傾向をチェックしながら、身軽な暮らしづくりの大切さを再確認する時間となりました。

7/28
(火)



第1期も残すところ2回となった第9講目は、**本郷新記念札幌彫刻美術館館長・吉崎元章さん**を講師に迎え、「**彫刻をもっと楽しむために～鑑賞のコツと野外彫刻のいま～**」をテーマにお話しいただきました。まず彫刻の基本として、量感・動勢・素材などの要素や、顔や手足を省略する表現の意図が紹介され、彫刻を見る際の視点が示されました。続いて、日本で野外彫刻が広がった背景や、酸性雨・いたずら・価値観の変化など、公共空間における彫刻が抱える課題が具体例とともに解説されました。さらに、彫刻にまつわる豆知識として、ブロンズ像の複製や戦時中の金属供出、裸婦像の意義など、思わず誰かに話したくなるエピソードが多数紹介され、彫刻を身近に感じられる充実した時間となりました。

8/4
(火)



令和8年度えるのす連続講座～女性大学～の最終回は、**北海道新聞社論説主幹の志子田徹さん**をお迎えし「**現在（いま）を知る～SNS時代と高市政権～**」をテーマに、現代社会におけるSNSの影響と政治との関係についてお話しいただきました。SNSは情報収集や自己表現の手段として広がる一方、フェイク情報の氾濫や意見の極端化を招く危険性が指摘されました。特に2016年の米大統領選や英国EU離脱では、SNSが世論形成に大きく作用した事例として紹介されました。日本でも選挙や外国人政策などでSNS発の不確かな情報が社会に影響を及ぼしている現状があります。SNS時代を生きる上で、偽情報に惑わされない姿勢や多様な意見に触れ、情報を見極める目を養う重要性を学びました。